

降誕節特別集会

神の最高の贈物——ルカ福音書第1〜2章

2009年12月13日 (東京 新宿)

奥田 昌道

クリスマスてなに？ ザカリヤとエリザベツ ガブリエルとマリヤ 神の思い 光輝高霊者 私
 は主の婢女 聖霊という受信機 神のプレゼント キリストの十字架 マリヤの讚美 イエスの
 誕生 シメオン老人 神さまからの一方的な愛 言い逆らいを受ける徴 讚美歌121番「まぶねの
 なかに」 キリストのご生涯 「我は道なり、まことなり、生命なり」「わが語りし言は霊なり、
 生命なり」 聖霊のキリストわがうちに 神の独り子キリスト 最高のプレゼントはイエス・キリ
 ストご自身 臨死体験 天命を自覚して今から再出発 祈り

●クリスマスてなに？

今、歌っていたいただきました讚美歌312番「いつくしみふかき」を皆さんはどんなお気持ちで
 お歌いくださったでしょうか。私はこの讚美歌を歌っていて、ああ皆さんがやはりこの讚美
 歌を心をこめて歌うということは、主イエス・キリストは今も生きて働いておられるという、
 今もここに働き給うという、そういうお方としてこの讚美歌を歌っておられるんだというこ
 とに気がついたんです。それでないと、

「いつくしみ深き 友なるイエスは、

罪とが憂いを とり去り給う」

と。過去も現在もこれから常にも生きて働いて、やってくださるという、そういうことでは
 ないと、この讚美歌は全然成り立たないですね。

「いつくしみ深き 友なるイエスは、

我らの弱きを 知りてあわれむ」

と。過去に弟子たちや人々を憐れまれたということなら、私たちに関係ありません。今も同
 じように、いやもつとそれ以上に深く今も我々を憐れんで、働いて助けてくださる。そうい
 うことではないと、この讚美歌は成り立たない。

しかも、過去は、人々は具体的な慰めを受けましたけれども、まだ一時的でした。すぐそ
 れは消え去りました。けれども、十字架、復活、そして天に昇って、今、聖霊という姿で我々
 の中に、また我々のそばにくっついてくださるお方はもつともつとリアルなんです。それを
 しっかり受けとっていたいただきたい。そういう思いでこの讚美歌は素晴らしい讚美歌だとい
 うことに気づきました。「今頃気づいたの？」と言われたら困りますけれども、昔からこれは
 好きだった。

「いつくしみ深き 友なるイエスは、



かわらぬ愛もて 導きたもう。

世の友われらを

捨てるときも、

祈りに応えて

いたわ
「いたわ 労りたもう」

と。今、生きて働き給うその主イエス・キリスト。そのお方を私たちはいただいているという、そういう思いでこれを心から歌ってくださったと思いますし、またそこまで気がつかなかったという方はこれから歌われるときは、そういう思いで心をこめて歌ってください。いや、素晴らしい讃美歌だということに気がつきました。

それから、小池先生はよく、2節の「慰めたまわん」とか、「いたわ 労りたまわん」というのはもの足りないから「いたわ 労りたもう」と断定して読めと仰るけれども、私は、「いたわ 労りたもう」であると、「いたわ 労りたまわん」であろうと、どっちでもよろしいと思う。「いたわ 労りたもう」と読む人は、これからも労ってくださるということを思いながら歌うし、「いたわ 労りたまわん」という人は、今、現に労っていてくださっているんだよと。二つを同時に、どっちの歌詞をとろうとも、その気持ちで歌えば、争いはなくなりますね(笑)。そういう弾力的な受けとり方をしてください。先生は非常にはつきりした人ですから、そういうところは妥協を許さないという面がありまして、先生の作られた讃美歌はみなそういう角度です。でも、そこで願っていらつしやることは常に今現在だということですよ。

「今、現在、いま」

という、それなんです。それを受けとって欲しい。それから、クリスマスといいますが、わが日本、あるいは世界はどうでしょうか。子どもたちに、

「クリスマスてなに？」

「サンタクロースがくるんやろ」

と(笑)。サンタクロースがプレゼントをくれるから素晴らしいんだと。全然、キリストが出てこないんです。サンタクロースの日みたいになっている。確かに子どもたちはプレゼントを楽しみにしてますし、サンタクロースのあの髭のはえたおじさん、赤い衣を着てやってくる実にユーモラスで、いいんですけれども、それがクリスマスだと思われたら、我々は大迷惑です。それから、表参道は非常に素晴らしいイルミネーション、大阪は御堂筋とか、いろんな所でイルミネーションでやってます。全部その外側的なことは非常に結構ですけども、

「クリスマスというのはどういう日？」

「さあ？ クリスマスというのは何やろか？」

というのが日本人の一般ではないでしょうか。そういう風潮に対してやはり私たちは、本当のクリスマスとは何かということをはつきりしていく必要があると思います。それはまず、言葉ではなくて、自分たちの生き方そのもので、生き方そのものでそれをアップールしてほしい。

「なんで、そんなにうれしそうにしているの？ なんで、いつもぺしゃんこになっ



たと思つたら、また起き上がって前に向かって進んでいくの？ 一体、その原動力はどこにあるの？」

「クリスマスだよ。クリスマスに神さまが最高のプレゼントを——サンタクロース
どころではない——最高のプレゼントとしてこのお方をくださった」

と。そのお方は今は天にいらつしやるけれども、一人ひとりの中に聖霊という姿で宿つてくださる。その方は私たちと共におり、そして内にいたもう。ヨハネ伝14章以下にはつきりと約束されています。そういう友であり、共にいてくださる、そして内にいてくださる。そのお方が、たえず天にいらつしやる神さまと、そのみそばにいらつしやるキリストは、天界のキリストさまとツーカーの間柄なんです。天にいらつしやるキリストさま、友なるイエスは、その方の思いを全部キャッチして私たちに物理的に伝え、与え、喜ばしてくださる、平安を与えてくださる。それが聖霊という姿のキリストさまです。天界のキリストさまはその統括者みたいなもので、全世界を導いてありたもうという、そういうお方なんです。

「そういう不思議な関係はいつたいあるんでしょうか」

と、現代の人は思うかもしれませんが、大いにあるということをお話したいと思ひます。

●ザカリヤとエリザベツ

それですは、クリスマスですから、聖書のクリスマスに係わるところを少しお読みしていきなさいと思います。聖書は、口語訳聖書もあれば、新共同訳もあり、あるいはフランススコ会というところから出てますフランススコ会の新約聖書と、それから文語訳聖書とか、いくつかのものがあります。もちろん、英語とかドイツ語とかいろんな各国語で翻訳されている聖書もある。どれもこれも比べると、ちよつとずつ違ふけれども、そういう違ふところは無視して、中身だけを受けとつていきなさいと思う。

まず、一番詳しくクリスマスすることを伝えてるのはルカ福音書です。そのルカ福音書の成り立ちとかいうことは一切省略いたします。そのものズバリの中身に入っていきます。そして、読む角度はどういう角度からかというと、神さまがどのように働きかけられたか。神さまの働き、御業、それに即してみています。それから、それを受けとつた人たちはどういう人だったか。

登場人物はマリヤさん、これは実にうるわしい乙女ですね。それから宿つた赤ちゃん、これはまだ生まれる前ですから、もつとも若年層です。そのマリヤさんとそれから宿つたお方——まあ、ヨハネも宿るんですけれども——そういうのを別にしたら、みんな老人ですわ。みんなここにいらつしやる方^{かた}とよう似ている。この中で若い方はむしろ例外者といつてもいいくらいで、他は、ずつとさつきから見渡していますと、みない勝負をしていますよ。ところが、祝福にあずかっているのはみなそういう人なんです。だから、皆さん、自信をもつ



てください。

「聖書では、私たちが主役なんだ」

という、つまり別の言葉でいいますと、世の基準では使いものにならない人、もう御用納めをした人、定年退職者、年金生活者、そういうものたちが主役なんです。バリバリ活躍しておられる方はもうちょっと先かもしれんけれども——まあそれは冗談ですけども——我々日本では、年とればみんなもう、

「ああ、先は短いな。楽しみはないな。お前はどこが痛いのか？ 俺もここが痛い」

「孫は俺なんかをかまってくれない。家ではやつかいものあつかいだ」

とか、みんなそれぞれもう先に希望がないという、これがだいたい、高齢者なんです。ところが、聖書のここを読みますと、それが非常に大事な役割を果たしている。祝福されている。そのことがわかります。つまり、神さまは、そういったとるに足りないもの、枯れ木のような存在を生かして、それを通して御業をなさっている。大事なことは、受けとるということだけなんです。「はい」と言いつて受けとっているかどうか、それだけなんですよ。

まずは始めの方から読みますと、登場人物はザカリヤとエリザベツです。二人とももう年老いて子どもを持たない。当時の社会では子どもを持たないということは、子孫が残らないわけですから、大変な肩身の狭いわけでした。ところが、このザカリヤ夫婦は非常に敬虔な、祈りの深い人たちでした。祭司の当番が回ってきたときに彼は宮に入って、そこで不思議なことが起こった。なかなか出てこない。一体どうしているのかと不思議に思っていたら、こういうことだったというんです。1章11節に、

「主の使いが現れて香壇の右に立った」

と。ザカリヤの他に誰もいません。だから、目撃者はいない。目撃証人はありません。だから、ザカリヤが「こうでした」と言えば、「ああそうか」と言うしかないわけですけども。とにかくこの際、そういう疑いの目をもって見ることはやめましょう。ここは裁判員制度ではありませんので（笑）。聖書の記述をそのまま受けとりましょう。

ザカリヤが香をたいていましたら、主の使いが現れて、香壇の右に立った。ザカリヤは驚きました。御使は言った。

「ザカリヤさん、恐れることはない。あなたの願いは、祈りは聞かれた。あな

たの奥さんのエリザベツさんはきつと子どもを産む。男の子だ。生まれてき

たらヨハネと名づけなさい。」

と。これは、ヨハネと付けるのはルール破りなんです。ザカリヤだったら、ザカリヤというその名前を付けなければいけないのに、ヨハネという全く別の名前をつけるということは、全く別人格という、別の霊的人物だという印です。

「ヨハネと名付けなさい。あなたに喜び、楽しみがある。多くの人もそれを



喜ぶ。この子どもは神さまの前に大いなるものとなり、葡萄酒とか濃い酒を飲んだりしない。お母さんの胎を出るやいなや聖霊で満たされる。そういう素晴らしい人だ。多くのイスラエルの人たちを神さまにたち帰らさせる。しかも、エリヤの霊と力をもって主の前に往く」

と。エリヤというのは旧約聖書の預言者の中で特別な人です。モーセとエリヤ、この二人は特別です。イエスさまが山で祈っておられて真っ白な姿に輝かれた。「山上の変貌」といわれています。その時に顕れてきたのがエリヤとモーセです。そして、どのような死を遂げられるか、つまり十字架の死ですね、その相談をしていたというのが福音書に出てきます。その時に顕れたのがエリヤとモーセです。モーセは律法を授かった人で、エリヤは預言者として素晴らしい御業みわざをした人。そういうエリヤの霊と力をもって主の前に道を備える。これは人間の心がゆがんでよそを向いているのを神さまへと向き返らせる。

「悔い改める」というのは「向き返る」ということです。こないだの11月の講演会でも申しましたね、背を向けていたのをクルッと光の方に向き直ると、光が射し込んでくる。背を向けている人にくら語りかけても通じない。やはり、目と目が向かい合わなければ。その仕事をするのが、このエリヤの霊と力をもったヨハネだよというわけです。

「戻もどれる者を義人の聡明さとしに帰らせて、整えたる民を主のために備えるためである」

と。ところが、ザカリヤはそんなことを突然言われても、全く分からないわけですよ。

「そんなことがありえましょうか」

と。誰だってそう思います。ところが、「そんなことがありえましょうか」というのがこの天使ガブリエルの逆鱗げきりんにふれたようです。

「こんな素晴らしい音信おとずれを持つてきたのに、お前は喜ばないのか。お前はこれから口を閉じよ」

と言って、おしにさせられてしまったという。

「こんな素晴らしい音信を告げるためにやってきたのに、そして、必ず成就する私の言葉を素直に受け入れないとはなにごとぞや。お前はもうものが言えなくなつて、時がくるまで、このことが成就するまでは黙るんだ」

と。これだけ読みますと、なにかザカリヤは気の毒なんです。当たり前のことを聞いているだけなのに。ということは、私流に解釈すれば、やはり神さまの業わざが働くときに人はしゃべらない方がいい。人がとやかく批評しない方がいい。

「一体、何でだろうか。そんなことが本当にあるのだろうか」

とか、いろいろ思いますよね。そういうことをつい口に出したりする。そういうことによつて神さまのお働きを妨げないように、静まりて待つという、



「黙してただ神を待て」

という世界、そういうことを示されたんだと思うんです。詩篇の中にもあります。「黙してただ神を待つ」と。やはり、人間はたえずキョロキョロしたり、「さあ大変だ」とあわてたりするけれども、大事なことは静まりて待つということ。そして、

「主さま、あなたのご計画は何でしょうか。あなたはどのような御思いをお持ちでしょうか」

と主に尋ねる。心と心の通い合いです。それを示していらっしゃるのではないかと思います。

ガブリエルとマリヤ

その次に今度は、ガブリエルはマリヤさんに頭れる。マリヤさんもやはり同じように、

「そんなことが一体あるんでしょうか。私はまだ男の人を知らないんです」

と。つまり、

「あなたは男の子を産む」

と言われたものですから。その時には、ガブリエルは実に優しいですよ（笑）。やはり、枯れ木と処女との違いでしょうかね。そんなことを言ったら叱られますが。

そここのところを読みましよう。エリザベツが身ごもって五月ほど隠れていた。

「ああ、私の恥をすすいでくださった」

とエリザベツは大変感謝した。その六月めに、御使ガブリエルがナザレというガリラヤの町にいる処女の所にやってきた。この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁をしていた間柄であった。名前はマリヤといました。御使がこの処女の所にやってきて、こう言った。文語で読みますと、

「めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり」

「おめでとう、あなたは祝福を受けていますよ。あなたは神さまの恵みを受けているんです。神さまご自身があなたと一緒にいらっしゃるんだから」

と。これは最高の挨拶でしょ。

「神さまと一緒にいてくださる。恐いものはないですよ。あなたは神さまの御力に守られているんです」

と。我々が欲しいのはそれです。この不安定な世の中で何が起こるかわからない。そういうときに、

「大丈夫だよ、神さまがあなたに付いておられるから。大丈夫だ。何があっても大

丈夫だよ」

と、しかも御使ガブリエルが神さまの御旨を告げたわけです。御使というのは神さまの御意を伝える役目でしょ。それをやったわけです。しかも、ガブリエルというのは最高の天使で



す。それがそう言った。その中身は何だろうかと。

「マリヤこの言によりて、心いたく騒ぎ」

と。この挨拶は一体どういうことかと思いいぐらしていた。すると御使は続けて言いました。

「マリヤよ、おそ懼るな、汝は神の御前にめぐみ恵を得たり」

「マリヤさん、恐れることはないですよ。あなたは神さまの御前に大いなる恵みをいただいたんです。恵まれています。恵まれたんです。祝福されているんですよ」

と。中身は何かというところ、

「あなたは身ごもつて男の子を生む。その名をイエスと名づけなさい。この方は大いなるものとなり、いとたかきもの至高者——つまり神さまです——神さまの子どもと称えられる。また、主なる神がその父ダビデに約束されたくわい座位をこのお方に与えになる。そして、このヤコブの家——アブラハム、イサク、ヤコブという——このイスラエルの家を永遠に治める。その国は永遠である」

というとんでもない祝福の約束の言が与えられた。「将来、このようなことがイエスという方を通して起こる」と言うならまだしも、そもそもまだ男の人を知らないマリヤさんに、

「あなたは男の子を生むんだ」

ということを突然言われたものですから、

「私はまだ男の人を知らないんです。どうしてそんなことがあるんでしょうか」

というふうと言ったわけです。その御使の答えが素晴らしいです。

「いとたかきもの聖靈なんじに臨み、ちから至高者の能力なんじを被わん。この故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし」

これは人間わざではないと。神さまの御業があなたの上に展開する。ここでは人の思いというものはもう完全にシャットアウトです。神さまがなさることは我々の思いをはるかに超えている。

●神の思い

11月の講演会では、「神の思いと人の思い」というタイトルでお話しました。旧約聖書からずつと拾っていきますと、いかに神さまの御思いというのはいわゆる我々の思いをはるかに桁外れに超えている、大変なものかということがよくわかります。それがここでも実現しようとしている。むしろ、ここでそれが成就しようとしている。我々を憐れんでくださる神の愛の御思いが今このマリヤさんの中に御子キリストを宿すという、誰もできない御業、全く人間わざではない御業、それを神さまはこのマリヤさんを選んで、そこで成就しようとなさっている。これはもう我々の理解をはるかに超えています。どんな説明をもつてきても説明はつかない。平伏ひれふすしかない。



「天地万物を創り給うた神」

とよく言いますね、「天地万物の創造者なる神」とか。天地万物の大宇宙——自然科学的にいえば大宇宙です——大宇宙というものを究め尽くした人はいるんでしょうか。その一部しか我々は知らない。銀河系でしょうか、その中の一つの地球という星の中に我々は住んでいる。そういう銀河系というようなものがいくつもいくつも宇宙にはあるという。果てしない大宇宙、誰も究め尽くすことができない。「天地万物の創造者なる主」ということを本気で言うなら、それをどのようにしてご意志をもってお創りになった方。しかも、ヨハネ伝では、

「万物はこのお方の御言によって成った」

と書いてある。このイエスというお方が——今に地上ではイエスという姿に成られるんですけれども——それが実は天界に天地の創られる前から居られた方だと、ヨハネ伝はそう証言しているわけです。

「太初に言ありき」

という。

「太初に靈言ありき」

と明治の聖書の訳にある。「ロゴス」と訳そうが、「靈言」と訳そうが、とにかくそういうお方が、神と偕にあられた。しかも、そのお方は神性をおびておられた。神と等しい性質のお方。同格であられた。そのお方を通して万物は創造されたと言言しています。

こんなものは科学的に証明することは絶対できません。だいたい、神さまの世界は、科学的に証明できるような世界ではありません。ただ受け入れるか、入れないかのどちらかしかないんです。科学的に証明しようなんていうことはもう諦めた方がいい。これはそうではなくて、桁がちがう、次元の異なるところから我々に切り込んできている、そういう啓示の世界なんです。我々の方からたどりついて捕まえるのではなくて、向こうの方から切り込んできて、そして「これだよ」と指し示してください。

ちようど、雲間を貫いて太陽の光がスツと射してきますね。そしたら、暗闇が明るくなってくる。そのように向こうの世界から、別次元から射し込んでくる。それが啓示なんです。イエス・キリストという方自身が神さまの啓示体なんです。

「私を見た者は父を見た。私の他に誰も天に昇った者はいない」

と言っておられる。このイエスという方は不思議な方ですよ。とにかく、夜通し山の中で祈っていて飽きないんですもの。飽きないと言いますか、我々は退屈してしまいますよ、

「一晩祈っている」

と言われたら。せいぜい、退屈しなければ寝てしまいますよ、季節がよければ。そんな一晩祈り続けることなんて、人間性に反することです。そう思いませんか。そんなものを強要する宗教家というのは非人間的な人種ですよ。私はそう思いますね。神さまはなにもそんな無



理な修行をしろとは仰らない。むしろ、

「向こうから来る贈物を受けとれよ。最高の贈物を受けとりなさい」

と。そうしたら、そういう我々の人間が同時に神性をおびてくる。神性をおびた存在に変えられる。素晴らしいですよ。自分が成るんじゃない。変えてくださるんです。そうしたら、枯れ木は輝く。うわべは枯れ木でも、内側は輝いている。

●光輝高霊者

だから、私は言ったでしょ。「後期高齢者」は、高く貴く輝く存在だと。高貴な輝きをもったそういう存在です。これが

「光輝高霊者」

です。光輝くいと高き崇高なる霊の存在です。これが我々ですよ。

「外側は枯れ木であっても、内側を見てごらん。見えないのか!」

と。そうやって、皆さん、胸を張ってください。花咲か爺さんは枯れ木に花を咲かせました。キリストは我々をこのような存在に変えてくださる。そのお方を私たちが100%にいただく。クリスマスはそれ以下であつたら、つまらないですよ。

だいたい、素晴らしい人物については、生誕百年とか、生誕二百年とか、そういうことを言つて、皆さんは記念します。それはその生涯が終つて、

「あつ、この人の生涯は素晴らしいかった。さあ、どんな生まれ方だつたんだろう、

どんな生涯を辿つたんだろうか」

と、あとから振り返つて、そして伝記というものが出来るものだと思う。だから、イエスキさまのことだつて、人の目にふれているのは、伝道を始められてからの3年間ですよ。それ以前はわずかに、ヨセフの子どもとして大工さんのお手伝いをして、祈り深いお方であつたらしいけれども、全部途中は省略されていますもの、福音書では。12歳の時にエルサレムで律法学者たちと問答をして、一歩もひかなかつたということを出てきます。それ以外は全部、記録されていない。

ところが、お生まれの方だけは、書かれているのはマタイ伝とルカ伝だけです。マルコ伝は、

「イエス・キリストの福音の始め」

といつて伝道から始まつている。ヨハネ伝は、

「初めに言ありき」

で始まつて、その後はすぐ伝道の話になつてしまふ。洗礼者ヨハネのところから出てきます。

「視よ、人の罪を取り除く神の子羊」

というところから始まつています。だから、誕生にまで遡っているのは、マタイ伝とルカ伝の二つです。しかも、両者は全く違つていますね。たとえば、マタイ伝では、御使がヨセフ



の方に顕^{あらわ}れる。それから、お生まれになつたらすぐエジプトへ逃げて行く。ルカ伝では全くそれは出てきません。ルカ伝では、

「神と人から祝福された」

というふうに書かれています。だから、全然、言い伝えの源になつた資料が異なる資料によつて出来上がっている。言い伝えなんです。だから、疑おうと思つたら、いくらでも疑つてください。しかし、そのまま受けとろうと思つたら、そのまま受けとつたらいい。その点は、竹取物語の「かぐや姫」ともまた違います。不思議さはそんな感じですけど、中身はやはり神さまが働いておられるから。そういう言い伝えというものは決して勝手に生まれてくるものではありません。マリヤさんは実在の人物です。マリヤさんは、

「私のことの次第はこうでした」

ということをはつきり証言なさっているはずです。だから、そういうものによつて成り立っているとは私は思いません。けれども、その実証的な、

「本当か？ 嘘か？」

といったことは、もう神さまの世界にお返ししておいた方がいいと思います。

「御使ガブリエルが顕れて、こうだった」

という。しかし、読んでみますと、

「なるほど、なるほど、さもありなん」

という、そういう真实性をもつて迫ってくる。それが私の実感です。

だいたい、私たちみたいなこんなだめ野郎が神性をいただく。しかもキリストと同じ姿に変えられる。これが奇蹟でなくて何でしょうか。マリヤさんに宿る以上の奇蹟ですよ、我々が神性をおびたキリストと同じ姿に変えられていくということは。そうですよ。

●私は主の婢女

そういう議論はその程度にしまして、この御使に語つたところに戻りましょう。

「マリヤさん、恐れることはない。あなたは神さまの御前に恵みを受ける。身ごもつて、男の子を生むんですよ。その名をイエスと付けなさい。彼は大きな者となり、至高者の、神さまの子と称えられる。イスラエルの家を永遠に治める」

と。イスラエルの家どころか、全世界を治める。

「私はまだ男の人を知りませんのに」

「いやいや、大丈夫だ。聖霊があなたに臨む」

と。神さまの霊です。

「神さまの霊があなたに臨んでくる。このお方の御力があなたを被う。だから、



大丈夫だ。あなたの身の上になんか起ころうと、それは神さまの御業だから」と。人が何と考えようと、人がどう思うと、それを無視して行きなさいという。

「あなたが生むところのものは聖なるお方である。神の子と称えられる」

と。それに対してマリヤさんは何と答えていますか。「視よ」とは「はい」ということ。

「視よ、私は主の婢女です」

と。僕しもべ、婢女はしため。つまり、主の御意に全幅的な信頼を捧げて、そのお言葉に全く従いきるとい

う者が「主の婢女」ということ。

「あなたさまのお言葉のように私の身の上になってください。それを慎んでお受けします」

と。これがマリヤさんの答えです。

これは大変なことだと思われませんか。男の人との関わりが何もないのに、つまりヨセフとの関係も何もないのに、お腹なかだけが自然に膨ふくれてくる。一体、人はどう思うでしょうか。それを乗り越えていかなければならない。一方では、神さまの御言を、約束をかたく信じています。こと神さまとの関係では、信頼は微動だにしない。ところが、この世間ということを考えてみたら、これは大変なことが自分の身に起こっている。弁解したって、全然誰も信じてくれない。「罪の女」と言われて当たり前前まへのことが起ころうとしている。それを乗り越えていかれる。

それでマリヤさんはエリザベツの所へ行きます。

「その頃マリヤ立ちて、山里に急ぎ行き、ユダの町にやってきた。ザカリヤの家でエリザベツさんに挨拶した。そうすると、エリザベツさんは、そのマリヤさんの挨拶の声を聞くやいなや、お腹の子どもが、ヨハネが躍った」

という。マリヤさんのご挨拶の言葉で子どもが躍ったという。そして、

「エリザベツは聖霊に満たされて、声高らかに呼ばわって言う、『女の中であなたは祝福されたお方ですね』」

と。エリザベツだけがマリヤさんを理解した。マリヤさんと共感共鳴した。聖霊に導かれて。声高らかに呼ばわって言う、『女の中たいにて汝は祝福せられ、その胎たいの実——

イエスさまですね——もまた祝福せられたり」

と。このお方は、私の主と呼ぶべきお方だ。この胎内に宿ったお方は主と呼ぶべきお方だ。そのお母さんであるマリヤさんがやってきたと。歳からいうと、エリザベツは年老いてましょ。マリヤさんはまだ乙女ですね。うら若き乙女です。けれども、そのマリヤさんに対してこのような祝福の言葉をかけている。

「わが主の母きたわれに来る、われ何よりてか之を得し。」



「一体、私にどんないいところがあった、私に何の値打ちがあった、こんな祝福に今あずかるのでしようか。ヨハネをいただいたということだけでも素晴らしいことなのに、加えてマリヤさんがわざわざこの山里にまで尋ねてきてくれた。ああ素晴らしい。あなたのご挨拶のお声が私の耳に届くやいなや、子どもヨハネが躍った。ああ、神さまの御言を信ずる者は幸いですね。主の語り給うことは必ず成就するんだから。」

と。これをしつかりと受けとつてください。世間の目がどうであろうと、我々の理性的判断がどういふふうに判断しようかと、そんなことと神さまの御業とは関わりがないということです。神さまの御業は、それをそのまま受けとること。そして、祝福される。

「私たちがいい人間であるから、わるい人間であるから」

とか、そんなことに関わりなく、神さまがねらいを定めれば必ずそれは成就してしまう。凄いでしょ。マリヤさんの声が、「こんにちは」という声が届くやいなや、お腹の中のヨハネさんが躍ったという。

●聖霊という受信機

ここで昨日のことをちよつとお話したい。私は一昨日の金曜日から東京に来ている。私の孫の翔しょうがこの夏以来とても大変な状況が続いている。気管切開をして、そこから空気を送りこんだり、痰を取り出したりということ、栄養は鼻からチューブを通して胃に送り込み、その他お薬なんかも送りこんだりしている。そういう状態で、声はだせません。目もおぼろにしかまだ見えていない。日によって体調もずいぶん変動がある。いい時もわるい時もある。私は毎日、すぐ近くにいますから、顔を見に行く。金曜日、出てくる直前に行きまして、様子を伺って、

「また月曜日の晩に帰ってくるからね」

と言って、こつちに来ました。そして、その晩に電話したんです。そうすると、母親の裕美が言うには、

「今日はとても調子がいい。さきほどお父さんに風呂に入れてもらった。調子がいいですよ」

と言ってくれた。昨日の晩も8時半に電話した。そうすると、コードレスの電話の受話器を——私の泊まっている東京のホテルの15階から掛ける電話が——その子機の受話器で翔ちゃんの耳元へ届けた。そうしたら、

「翔ちゃんがニッコリ笑っている。喜んでいる」
と。そばから母親が、

「翔ちゃんはうれしそうよ。完全に聞こえている。翔ちゃんはうれしそうな顔して

いるよ」

と。私はいくつか言葉をかけました。

「翔ちゃん、元気でいてくれるの、うれしいよ、翔ちゃん」

と言うと、またニコツと笑うそうなんです。これは不思議なことですよ。東京のホテルの一角から電話を掛けると、向こうはコードレスの受話器を耳元にやって、そして聞こえている。それに対してニコツと笑ってくれている。翔ちゃんは完全に聞こえているという。

神さまの世界からの音信もそうじゃないでしょうか。二千年前にいらつしやつたキリストさま、それが今も生きて働いておられる。そのお方は天界におられる。天界におられるイエスさまが我々の中に受信機を持つておられる。聖霊という受信機がある。聖霊というお方がそばにくつついてくださる。キャッチして伝えてくださる。我々はニコツと笑うと、それがまた天界へ届けられる。そういうふう交流が行われているんです。全世界のどこに居ようと、どこにいる人であろうと、

「その名を信せし者には神の子となる権を与え給えり。その方々は人の願いに

よらず、肉の欲ねがいによらず、神によつてのみ生まれました。神は神の子となる権、

資格を与えてくださった」

と、ヨハネ伝の始めにあります。それが成就している。だから聖書に書かれていることはすべて驚きの世界です。「驚嘆驚倒すべき事態である」と小池先生は言われました。

「聖書は驚嘆驚倒して読むべき書なり」

と言われた。

それから、こんなお話もしましょう。「COP15」とかいうのを今、コペンハーゲンでやっているでしょ。NHKのニュースで見ていると、

「あちらにいる誰々さんと呼んでみます」

と呼びかける、しばらくすると

「はい」

と応えている。東京から呼びかければコペンハーゲンの特派員がそれをキャッチしてまた返事をして、それが伝わってくる。それは宇宙衛星を通してですね。宇宙衛星に電波が届いて、それからこちらに流れてくる。

特派員は聖霊ですよ。神さまの特派員であるキリストの特派員である方は聖霊さまです。そのお方は我々のそばにいらつしやり、中うちにいてくださっている。そしてそういうキリストさまの御思いを全部キャッチしてくださる。それからまた、我々の思いを全部向こうに伝えてくださる。そして、交通ができています。そういう事態なんです。今は、宇宙衛星を通して現地の情報が伝わってくるのを、皆さんは不思議にも思わないでしょ。私は不思議だと思えますよ(笑)。不思議だと思う方が普通でないですか。地球のどこか反対側に居るような所

へ伝わっていくんですものね。そういう事が人間のテクノロジーの世界で成り立っている。それから、生物の世界の微細な世界のものにまで分析が行き渡っている。生命の世界でも。だから、自然科学的な面におきましては、この宇宙あるいは我々生物体の、微に入り細に至るまでいろんなものを究め尽くしてきた。それが現に応用されて、いろんな働きがなされている。しかし、こと神さまのお働きに関しては全く無知蒙昧もうまいなんです。どんな素晴らしい自然科学者であろうと、みんなその世界との間には断絶きんげつがある。

誰がそれを受け入れているかというのと、皆さん、

「その名を信ぜし人」

なんです。この福音という喜びのおとずれを「はい」と言つて、

「はい、私は主の僕です。主の婢女はしためです。御意みこころのように成つてください」

と言う人にだけ、その道は開かれて成就して行くんです。全く平等公平です。学があるかとかないとか、金持ちであるとか貧乏であるとか、身体が強いか弱いとか、そんなことには一切関わりなく、人が人であるかぎり、魂があるかぎり、神さまは呼びかけておられる。また、我々が心を開くかだけ。心を開く。心の窓を開く。そうすると、光が射し込んでくる。こういう世界なんです。実に不思議であり、ありがたい恵みの世界です。

●神のプレゼント

マリヤさんは、

「めでたし、恵まれたる者よ、あなたは幸いなひとです、祝福されていますよ」

という、マリヤさんにガブリエルを通して伝えられた神さまの祝福の言葉は今、天界のキリストから私たちに対して送られている。皆さん一人ひとりに送られているんです。まだはつきりしていない人は、

「主よ、はつきりとそれを受けとらせてください。何か資格があるんでしょうか」

「何もいらんよ。これはプレゼントだ」

と。贈物、プレゼントです。プレゼントでないものは報酬といいます。報酬というのは働きに対する対価ですから。働きに対して報いがくる。因果応報の世界です。

「お前はよいことをした。だから、こういうご褒美をやろう。お前は変なことをした。

だから、罰をやろう」

という。

「罪の払う報酬は死なり」

とローマ書に書いてある。恐ろしいですね。「罪の支払う報酬は死なり」という。ところが、神さまが我々にくださったのはプレゼント、「永遠の生命」である。プレゼントというのは、こちらの値打ちには関わりない。こちらの値打ちだとか、いいやつわるいやつ、どんなこと



であつたつて関わりない。

心の砕けです。心が固く閉ざされていたらだめなんです。ポカーンと破れないとだめです。ポカーンとはじけないとだめなんです。銀杏ぎんなんの果みも固いですよね。あれもポカーンとはじけるといいものが出てくる。そのように、我々の固い固い閉ざされた心、貝のように固く閉ざされているものがポカーンと開くと、そこに贈物が流れ込んでくる。でも、砕けがまた大変なんです。

「私は砕けないんです。傲慢で砕けないんです。どうしてくれるんですか」
と。十字架です。ここで砕いている。

「十字架でお前は砕かれているよ」ということ。

●キリストの十字架

こんなイエス・キリストという素晴らしいお方がなんで十字架にかかるんですか。何で十字架にかからなければならぬんですか。あのお方は報酬としてスツと天に行けるお方ですよ。あの素晴らしい生涯。神さまに逆らつたことがない。

「すべてあなただけです」と言つていた。

「あなただけです。私はあなたのものです。私は何も自分のものではありません。あなただけがすべてです」

と。そうやって祈つて、一つになつて、そして神さまの愛をこの世に現している。そのお方は報酬として受けるのは「永遠の生命」です。スツと天に昇つていく。当然でしょ。義なるイエス・キリストはそのまま永遠の生命の世界に、神さまの世界に戻つていく。これも当然のことです。ところが、そのお方が報いとして死を、罪の死を、

「罪の払う報酬は死なり」

という、それを受けとつた。こんな不合理なことではないですよ、世の中に。何が不合理だといつても、イエス・キリストが十字架で死ぬというぐらいの不合理なこと、不条理なことはありません。しかも、それが御意みこころだという。ゲッセマネの苦しみです。

「何でなんですか。神さまに逆らつたこともない。あなたが私のすべてでした。あなたは常に私と一緒にいてくださった。私もあなたの中に生きました。あなたと私は一つでした。それが、そういう生涯の報いが罪の払う報酬としての死なんです。そんなことがありえていいんですか。神さまの法則というのはそんなものなんです。神の聖なる法則はそんなものなんですか。他に道はないのでしょうか」

と。それがゲッセマネの苦しみの祈りでしょ。私はそう受けとつている。あそこでもしか苦し



んでおられないです、イエスは神さまの前に。それくらい、イエスさまというのはいつも神さまともう蜜月、常にハネムーンですよ。祈っていらつしやったら、楽しくてしょうがないという。神の懐にいますキリスト、それがこれ(十字架を受けとられた。それは碎け得ない我々をあそこで我々に代わって碎かれてくださった)っている事実なんです。

イエスはヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられました。ヨハネは止めたんですよ。「あなたは私から洗礼を受けるようなお方ではありません。私が洗礼を施して人々をこつちへ向き直らせる。向き直った人にあなたご自身がお語りになる。そういうお方でいらつしやるのに、あなたはどのようにして悔い改めの洗礼を私からお受けになるんですか。そんなことはあつてはなりません」

と言つて断つたでしょ。ところが、

「いや、今は受けさせてほしい」

と言つて、人々と同じような姿になつてヨルダン川に身を沈められた。全くイエスという方には、自惚れだとか、「私は義人である」とか、そういうものは全くない。

「私も同じだ」

と言つてヨルダン川に身を沈められた。この姿、これが正に碎けの姿です。神さまの前に平伏しておられる姿。

「私は特別だ」

と思つていらつしやらない姿。しかし、神さまの側からみたら、こんな素晴らしい人はいない。だから、洗礼のヨハネから——水のバプテスマというのは水の中に浸される——完全に水の中にどっぷり浸される。上がつてきて祈つておられると、天が開けて、聖霊が鳩のごとく降ってきた。そして、御声があつた。

「これこそ私の心にかなう者。私の愛しむ子だ」

と。ヨハネから何千人の人が洗礼を受けましても、そんなことは誰にも起こらなかつた。イエスというお方においてだけそれが起こつた。その碎けの姿、平伏しの姿、それを神さまは喜ばれた。そして、

「聖霊が鳩の如く形をなして宿つた」

と書いてあります。それを小池先生はこう言われた。

「我々の悔い改めなんていうものは高が知れている。三日も続かない。だから、本当の悔い改めができない我々に代わって、イエスが自ら悔い改めをなさつてくださった。完全な悔い改めをあそこでやってくくださった。」

それから今度は、十字架で我々の罪の根源を片づけてくださった。碎け得ない私たちを砕いてくださった。自分で碎こうなんて思つても碎けない。傲慢を取り去ろうと思つても、取り去れない。



それが、十字架であなたは既に砕かれています。あなたという自我、罪の塊、神さまに逆らう本性、これが全部そこでぶつ飛ばされています。片づけられています。掃除そうじされています。きれいになっています。まっさらです。真っ白です。雪のように白くなっていますよ」

と、十字架でね。そこに聖霊という姿でイエスは今度は来てくださる。聖霊が来る。これはペンテコステの時に起こりました。天界から聖霊が降くだってきた。我々は今、主を信ずる者にも直ちに常に——十字架を瞑想して

「主さまー」

と呼びかけて祈る。「主さま」という、それだけでいい。「どうこうしてください」という注文はいらない——「主さま」と、それだけでスーッと来てくださる。無条件に来てくださる。あの祝福されたマリヤさんと同じことになるんです。

●マリヤの讚美

そして、マリヤさんの讚美の歌がそこに出ています。

「私かえりを顧みてくださった」

と。これは本当に素晴らしい讚美です。旧約聖書の中の神讚美をとどころ合成したような讚美の言葉です。大事なところは、

「わが心、主あがを崇め、わが霊は、わが救主すくいぬしなる神を喜び奉る。その婢女はしための卑いやしきをも顧み給えばなり。視よ、今よりのち万世よろずよの人、われを幸福さいわいとせん。全能者、われに大なる事を為し給えばなり。云々」

とあります。それから今度は、しばらく先へ行きますと、いよいよヨハネが生まれます。どんな名前を付けるかという段階になりまして、生まれて八日めに名前をつける。そのときに人々は当然、ザカリヤと名前をつけるものだと思います。お母さんの方は

「ヨハネとつける」

と言う。

「いや、それはおかしい。そんな名前は今までのあなたの親族の中になかったではないか」

と。今度は、ものを言えないザカリヤに対して、

「あなた、お父さんはどうお考えですか」

と。そうしたら、書き板をもとめて、

「その名はヨハネ」

と書いた。エリザベツさんの答えとザカリヤさんの答えが一致した。

「ザカリヤの口たちどころに開け」



と書いてありますね。

「舌ゆるみ、物いいて神を讃めたり」

と書いて、ザカリヤの聖霊に満たされた讚美の言葉がずっと続きます。この讚美はイスラエルの救いを歌っています。イスラエルというのは小国ですから、周囲の民族からたえず脅かされている。それをこの神さまは守ってください。アブラハムへの約束を成就してくださいという讚美の歌です。

「我等のために救の角を与えてくださった」

と。キリストのことです。これは将来のことですけれども、74節に、

「我らを仇の手より救い、生涯、主の御前に、聖と義とをもて懼なく事えしめ給うなり」

と。これがイスラエル民族の使命なんです。神に仕えるというのがイスラエル民族の民族的使命です。そして、ヨハネに対して、

「幼児よ、なんじは至高者の——即ち、キリスト・イエスの——預言者として称えられん。これ主の御前に先立ちゆきてその道を備え、主の民に罪の赦しによる救を知らしむればなり。これ我らの神の深き憐憫によるなり。この憐憫によりて、朝の光、上より臨み、暗黒と死の蔭とに坐する者をてらし、我らの足を平和の路に導かん」

と。こういうふうな預言ともいえるような讚美をいたしました。

●イエスの誕生

それから今度は、イエスの誕生が第2章に出てきます。

マリヤさんがエルサレムの近くのベツレヘムという所にたどりついたときに臨月になって、子どもを生んだ。

「マリヤ月満ちて、初子を生み之を布に包みて馬槽に臥させた。旅舎におる処なかりし故なり」

と。一番貧しい生まれ方をなさった。8節以下には、牧者たちに祝福が臨みます。野宿して羊の群を守っている牧者たちは、多分貧しい人たちです。人が眠るときに働く、そういう仕事ですから、貧しい人にちがいない。主の使いがその傍らに立ち、主の栄光が彼らの周囲を照らした。彼らは懼れました。しかしながら、御使は、

「懼れることはない。素晴らしい音信を告げるのだから。今日ダビデの町に救い主がお生まれになった。これ主キリストである。その徴は何か。馬槽の中に、飼い葉桶の中に布でくるまれた赤ちゃんがおるよ。これがその徴だ」

と言った。一番どんだの生まれ方をしたこの赤ちゃん、これが凄い、正にこれが天地の王た



るべき方である、と言っんです。

「^{たちま}忽ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神に讚美して言った」

と。この讚美の訳は、フランシスコ会の訳によりますと、

「いと高き天においては神に栄光、地においてははみ心になう人々に平安」

と。これが本当なんです。原文には、「神にあれ」とか、「人にあれ」とか、そういう言葉はないそうです。小池先生はこれを、

「いと高きところには神に栄光顕れたり。むしろ顕れた。だからいよいよ顕れてくださいという願望がそれに続くだろう」

と言っておられました。文語訳でも、「平和」とありますけれども、小池先生は、

「神さまと人間との関係における心の姿は平安、安らかさである。人々の間にながれる和、これは平和だ。平和というのは人と人との間の和らいだ姿を平和という」

と。聖徳太子の、

「和をもつて貴しとなす」

というのは人間関係です。それに対して、神さまとの関係は平安です。

「われ平安を汝らに遺す。この平安は世の何ものも奪うことができない」

と、ヨハネ伝16章でも約束されています。やはり、日本語としては「平安」というものと「平和」というものを区別した方がよいでしょうね。ヨーロッパの言葉では、みな同じひとつの言葉なんですけれども、日本語は繊細ですから。その繊細な日本語のよさをいかすならば、神さまとの関係では平安、安らかさで、人との間では和らぎ、和がある、平和だということ。そういうことで、この天の軍勢が歌ったこの讚美の合唱は、

「いと高きところには神に栄光が顕れている。人々には平安が宿っている」

という讚美なんです。本当にその時点で宿ったのかどうかは知りませんよ。

「宿るはずだ、絶対宿るんだ」

という願望がこめられた祝福の言葉だと思う。

「いと高きところには天に栄光が顕れたり」

と、これはそのままでしょうね。しかし、

「地には平安、神の御意になう人に既に顕れたり」

というふうに断言して天使は合唱している。牧者たちはこの言葉に励まされて行つた。そうしたら、御使の告げたとおり、みすばらしい所にヨセフとマリヤさんがいて、飼葉桶に布に包まれた嬰兒が寝ている。それを見て、

「実はここに来たのは、御使が現れてこうだったんですよ」

と言つて、ことごとく告げた。そうすると、聞く者はみんな、

「おお、それは不思議だなあ」



と怪しんだ。マリヤさんだけはじつと黙って聞いて心にとどめていた。それは、聖霊で身ごもって出産にいたるまでの長いみちのり、それを自分ひとりですつと耐えてこられた。エリザベツさんだけはわかつてくれた。ヨセフにどのようにお伝えになったかはしりません。けれども、分かるはずはありませんね。ヨセフの方は、

「ほう、そうなのか」

と(笑)。これは私の勝手な想像ですよ、分かるはずがないですもの。そして今、牧者たちがやって来て、「かくかくしかじか」と。「なるほど」と。もう人に言ったってしょうがない。これは神さまとの間の神秘です。秘め事ですものね。だから、黙ってそれを心にうなずいておられた。牧者たちは十分満足して、神を讃美しながら帰って行ったという。

●シメオン老人

そして、八日めにイエスという名をつけて、宮に献げる儀式があるので、赤ちゃんを携えて、ヨセフとマリヤさんが宮にのぼりました。そうしたら、シメオンという、また老人が現れた。この人は義かつ敬虔なる方^{かた}で、イスラエルが神さまに慰めを受けることを待ち望んでいた。聖霊がこのシメオン老人の上に宿っていた。また、聖霊がお示しになるには、

「救い主を見るまでは絶対に向こうの世界にいかないから」

という約束を受けていた。聖霊の示しを受けて宮に参りますと、ちょうどそこに、階段をのぼってくるヨセフ、マリヤ夫婦と嬰兒^{みどりご}を見た。つかつかと近づいて行って、その子どもさんを抱きとつて、まず神さまを讃美した。

「ああ今こそ、どうぞ、この僕を安らかに御許^{みもと}に召してください。あなたの約

束は成就しましたから。もう既に、主の救いを見ましたから。これこそ諸々

の民の前に備え給うたお方、万民のために備えてくださった救い主です。異

邦人を照らす光、そして御民^みイスラエルの栄光です」

と。シメオン老人の祝福で我々は心安まるんです。ザカリヤさんまでは自分たちの民族の祝福ばかりを祈っている。当然ですけれども。アブラハムになさった約束を成就してください。てありますがどうございしますと、ザカリヤさんは讃美していたけれども、このシメオン老人は、

「これは万民の救い主、異邦人を照らす光、御民^みイスラエルの栄光」

と言った。お父さん、お母さんは、不思議なことを言うお方だなと思って、このシメオンさんを眺めていた。そして今度は、お母さんに言う言葉は胸刺される言葉です。

「この幼児^{わがなご}は、多くの人の或いは倒れ、或いは立たん為に、また言い逆らいを

受くる徴のために置かれている」

と。イエスご自身が、

「この石の上に落ちるものは砕かれる」



というようなことを福音書の中で語っておられます。つまり、妨げの岩、躓きの石であると。よりすぎる者にとつては救い、しかしそれに躓く者にとつては救いからまれてしまうという、そういう分水嶺である。

それを分かつものは何かというと、砕けの魂かどうかということ。どういう宗派に属するかとか、どういう宗教を信じているかということではなくて、その人の人間としての、人としての在り方が本当に神さまの前に心砕けた在り方であるか。それとも、自分を立てていく、自分の方から報酬として永遠の生命を獲得しようとする、そういう路線の人であるか、あるいは宗教であるか。それとも、ひたすら神さまの一方的な恵み、贈物、それにすぎるしかないという、そういう平伏しの魂であるか。この二つなんです。別な言葉でいうと、イエスは、

「おきな幼児のこころ」

と仰った。大人というのは自分を立てる。自分を何ものかだと思っている。また、何ものかにして欲しい。褒めて欲しいんです、

「お前はよくやった」

と言つてね。ご褒美を欲しいんですよ——まあ子どもも玩具おもちゃを欲しがりましたよ——
—それに対して、

「私には何もありません。ただあなたの恵みだけです。あなたさまだけです。あなたさまという、そのプレゼントだけを慕っています」

という、そういう魂。自分の中によりどころを持たない魂。

「自分はとても見込みはありません」

と、自分に愛想をつかしているような魂。それが祝福されるというんです。

●神さまからの一方的な愛

私は、教育の世界においても、家庭教育においても、このことをしっかりと受けとってほしいんです。親も先生もみな出来る子ばかりを褒める。かつこいい者ばかりを褒めたたえる。それに対して、いじめられたりとか、あるいは自分を卑下して、行き場のない子たちがどんどんどんどん追い詰められて行っている。いじめの対象になつてしまう。いじめられている子、褒めそやされている子——それもまあ、褒めそやされる子どもも子どもさんで素晴らしいけれども、それはそのような報いをいただいているんだけど——顧みられない子どもたち、行き場のない子どもたち、しかし心の中で呻いている子どもたち、それに対して、

「神さまの方から一方的な愛が来ているんだよ。サンタクロースはそんなプレゼント以上のものを、「主さま」というその最高の贈物を携えて来ている。このお方は、姿は見えないけれども、あなたを抱きしめているんだ。お父さん、お母さんの愛よりも深い。誰が捨てても、顧みなくても、このお方はあなたを抱きとっている。



お前と一つになりたいと言っておられるよ」

と。そういうことをしつかりと子どもさんに語ってほしいんですね。

さっきの電話の話ですけども、私は、その孫たちに——上は翔しょうといいます、下は衡平こうへいといっています。6才違いですけども——衡平に対していつも、

「衡平ちゃん、元気か？ 衡平が元気でしたら、おじいちゃんはどうでしょう？」

と、そればかりを言うものですから、向こうからの電話で、

「おじいちゃん、衡平よ。衡平ちゃんは元気よ。うれしいね？」

と、こう言ってくれるんです。

「ああ、おじいちゃんはどうでしょう？」

と。元気だったら喜んでくれるということがもうしみ込んでいますから、挨拶は、

「衡平、元気よ。おじいちゃんはどうでしょう？」

「ああ、うれしいよ」

と。翔に対して、

「翔ちゃん、元気か？ おじいちゃんはどうでしょう？」

と。それで喜んでくれるでしょ。神さまはそのようにして、

「元気か？」

「ああ、元気だよ」

と言う。

「元気をあげるよ、お前を愛しているよ。お前を抱いている。絶対、お前を捨てない。

いつも一緒におるよ」

という、そういうはげましの言葉だけを与え続ける。

「誰が何と言ったって、私はお前を捨てない。お前を抱きとっているよ」

という、その言葉。これが欲しいのではないのでしょうか。

それは何も子どもさんだけではない。大人だってそうですよ。追い詰められて、行き場がなくなると、自ら生命のピリオドを打つ。その心。これはもしも、そうやって自ら生命を断つたからといっても、決して安らかさは訪れない。そこは暗黒の世界です。そうではなくて、

「このお方、生命そのものなるお方、愛そのものなるお方に、己をすべて捨ててこのお方にすがってごらん。このお方を心の中に受け入れてごらん。そうしたら、あなたは変わるんだ。それからでも遅くはないよ。それでもだめだったらしょうがない。しかし、まずはやってみよう」

と。そういう言葉をかけていたくださいね。そういう言葉をかけることのできる人は、自分の中にそのお方を持っていないければ。ペテロは、足の不自由な物乞いに

「金銀は私にない。しかし、私の中にあるものをあなたを上げよう。イエス・



キリストの名前だ。イエス・キリストの御名みなによって立て！」

と言って、手をとって起こしたら、立ってしまったという。たちどころにくるぶしが強くなつて立ったという。そして、踊りくるつて喜んだということが使徒行伝の中に出てきます。あれはペテロではないですよ。聖霊がペテロを通して働き給うた。ペテロに乗り移つておられる、復活されたキリストさまがペテロを通して働かれた。ちやうど、父なる神さまがイエスを通して働かれたのがあの福音書の御業であるように、今度は、

「我を信する者は今、我よりも大なる業を為すべし。われ父に往けばなり。」

「そして、私は帰つてきて、お前と一緒に働くから。お前と一緒に働くから、今以上のことができるんだよ」

ということを仰つた。それをペテロやヨハネたちはやったわけでは

私たちがそういう奇蹟を求めません。そういう時代ではないと思う。何か「アッ！」と驚かすようなことをやって、キリストのところ连接到いていくという、私はその道は選ばない。それはえてして霊的宗教になります。霊力を誇る宗教に切り替わります。そうではなくて、

「キリストは本当の慰め、本当の喜び、本当の平安、永遠の生命、それをくださるんだ。これを私はいただいている。同じ世界に入ろうよ。一緒に歩こう。一年間でもやってくれ。それでだめだったら、そのとき相談にのろう。そのとき、お前は死にたければ、私は立ち会うからね、立会人だ」

と。そのくらいの気持ちですね。それは、具体的には、ときには経済的なお助けをするとかいうことがあるいは必要かもしれないけれども、まず何よりも、そのようにして、

「わが言ことばは霊いのちなり生命いのちなり」

「我は道なり、まことなり、生命なり」

という、そのイエス・キリストご自身をプレゼントとして差し出す役割が我々にはあると思います。神さまの側は、このクリスマスというそのときに、このプレゼントをくださったんです。それを皆さんはしっかりといただいてほしいんですね。

●言い逆らいを受ける徴

このシメオンさんの預言の言葉、

「多くの人の或いは倒れ、或いは立たん為に」

と。「立つ」はプラスに行く方ですね、生命へと立ち上がる。「倒れる」というのは、躓よみいて黄泉よみにくだつてしまうようなもの。しかもまた、

「この方は言い逆らいを受ける」

と。当時の宗教的指導者たちにことごとく否定されました。民衆たちも最後には捨てました。「お母さん、あなたの胸は剣で差し貫かれますよ」



と。キリストが差し貫かれた時に、お母さんのハートが差し貫かれる。当然のこと。人のもつとも深い罪性、罪、心の思い、それがそういう形で現れてくるという、そういう預言です。それから、もう一人、ご老人が出てきます。アンナという女預言者、84年間寡婦であった。結婚して7年、それからやもめになって84年。ですから、年齢でいうと100歳を越えているかもしれない。そういう不思議な女性です。宮を離れず、夜も昼も断食と祈禱とを為して神に仕えていた。この女預言者が近よつてきまして、神さまに感謝し、そして、エルサレムの贖いと救いを待ち望む人にこのイエスさまのことを語り告げたという。

このように、ことごとく、用いられている人はこの世的には枯れ枝のような、枯れ木のような人が用いられている。それから、乙女マリヤが用いられている。エリザベツもマリヤさんも本当に魂の純な人です。御言は必ず成就すると信じて疑わない人。そういう方々をとおして御業はなされていきました。

●讃美歌121番「まぶねのなかに」

今日、私はもう一つ歌いたい讃美歌があります。それは121番の「まぶねのなかに」です。この讃美歌は、主イエス・キリストのご生涯を見事に歌いあげています。

- 1 馬槽まぶねのなかに うぶごえあげ、
木工たくみの家に ひととなりて、
貧しきうれい、 生くるなやみ、
つぶさになめし この人を見よ。

「キリストは我らの弱きを思いやることのできないお方ではない」

とヘブル書にあります。この大祭司は我らと同じ悩み苦しみを、生きていく間にしつかり味わってくださった。

- 2 食するひまも うちわすれて、
しいたげられし ひとをたずね、
友なきものの 友となりて、
こころぐだきし この人を見よ。

慰め深いお方である。

「貧しい人は幸いである。天国はあなた方のものである。私があなたの天国となるから。悲しんでいる人は幸いだ。その人は慰められる。私があなたの慰めとなるからね」

と、全部、「私」というのが入っているんですよ、

「私がこうしてあげるからね」ということ。



「天の父はこうしてくださるであろう」

と、地上にいらつしやるイエスは天界の神さまのことをそう言っておられる。でも、今はちがうんです。「私が」という。

「私が父の約束を全部、成就してあげるからね。私はこうしてあげるよ」

と、そういうふう読んでいただきたい。そして、涙なくして読めないのはこの第3節です。

3 すべてのものを あたえしすえ、

死のほかなにも むくいられで、

十字架のうえに あげられつつ、

敵をゆるしし この人を見よ。

ここに「むくい」とある。

「罪の払う報酬は死である」

と言いました。このお方はすべてのものを与えた。当然、永遠の生命がそのむくいであるはずなんです。ところが、死がむくいであったという。

「すべてのものをあたえしすえ、

死のほかなにもむくいられで」

という。そして、十字架——これは極刑でしょ——そこでなお敵を赦した。

「彼らを赦してやってください」

と。片一方の盗賊に対しては、

「なんじ我と偕にパラダイスなり」

と言われた。こういう無限無量の、どこまでその愛は深いのかと。これはただものじゃないです。正に、第4節に歌っていますように、「この人こそ、人となりたる活ける神」ご自身であると云う。

4 この人を見よ、 この人にこそ、

こよなき愛は あらわれたる、

この人を見よ、 この人こそ、

人となりたる 活ける神なれ。

これを聖書の中で見ますと、ピリピ書2章にこれが出てくる。これもフランシスコ会の訳を見てみますと、6節から、

「⁶キリストは神の身でありながら、神としてのありかたに固執しようとはせず、⁷かえって自分をむなくして、しもべの身となり、人間と同じようになった。⁸死にいたるまで、十字架の死にいたるまで、へりくだって従うものとなった。⁹それゆえ、神はこの上なく彼を高め、すべての名にまさる名を惜しみなくお与えになった。」



と訳しています。文語訳ですと、

「⁶即ち彼は神の貌にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんとは思わず、⁷反つて己を空しうし僕の貌をとりて人の如くなれり。⁸既に人の状にて現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順い給えり。⁹この故に神は彼を高く上げて、之に諸般の名にまさる名を賜いたり。」

とあります。ですから、さきほどの讃美歌12番とこのピリピ書2章6～11節がキリストのお姿を歌っています。

●キリストのご生涯

このご生涯は何かといいますと——皆さん、キリストのご生涯とはどんなものであったのだろうかということをご自分で思いめぐらして、メモしてみてください。何がそこに浮かびあがってくるか。私もそれをやってみた。いろんな特色をあげてみましょう。

まず、神さまの御前に平伏し、砕けの姿。完全に神さまに明け渡しておられる姿。全託、明け渡しの姿です。

それから、祈り。祈りというのは神さまとの霊の交わりです。それから、神の御業の展開。神の御業というのは愛の御業でありますから、生命をお与えになる。もつと言いますと、無条件の救い、荷い、赦し。つまり絶対愛です。相手の姿、形にかかわらず、一方的に注がれる神さまの絶対敵な愛。その極致がこの十字架でした。

そして、見事に死を蹴破つて、あの素晴らしい輝く霊体となって甦れてくださった。復活における勝利。生命の勝利、義の勝利を現してください。霊体となって甦れてくださった。そして今度は、天界から聖霊という姿で我々の中に宿り、我々と常に一緒にいてくださる。絶えず執り成してください。そういうお方があります。

それから今度は、将来のことです。それは再臨とか、最後の審判とか、そういうことではない。いろいろ言われていますが、我々には想像もつきません。私たちにとっては、希望を与えてくださっているという事で私は十分だと思っています。私たちがやがてこの地上を去るならば、キリストの御許へ呼ばれて行く。そこでキリストと一緒に過ごす。それで十分です。世界がもう一回創り直されるとか、そんなことは我々にはもういい。

キリストのあの永遠の世界、霊界。別次元の、キリストが今、住まっついていらつしやる世界。そして、私たちの先輩たちがみなそこへ行った。肉親たちも行っている。そこで輝いている。そういうところに我々も行つて、今度はこの地上を助け導く役目を仰せつかる。そういう素晴らしい次の人生が待っています。これが「第二の人生」なんです。本当の意味の第二の人生が待っている。

第一の人生も、地上の人生もいろいろな段階がある。幼年時代、青年時代、壮年時代、そ



れから熟年時代、そして「光輝高霊者」(後期高齢者)の時代というふうには、いろいろ段階があります。それを終えますと、もうひとつ高い次元に入って行く。このキリストと同じ姿に変えられていく。そういう世界があります。

そのお方は、ご自身について言うならばまず、義の生涯です。義というのは神の御意を百%に行うというのが義なんです。己の思いを貫くのは義ではない。

キリストの義と愛は、神さまという、宇宙万物の創造主たるお方、そのお方の御意にすべて従うという、神の御意を行ずる。

「私は何もありません」

という縦の貫き、これを貫く姿が義なんです。それから、人に対しては愛、無条件の愛です。神さまとの関係で義を貫く。その神さまの御意の究極は何かというと、「義人であるお前をすぐに天へ連れて行く」とは仰らなかつた。

「お前は、あのできそこないのために生命を捨てろ」

と。それはないでしょ。私だつたら、絶対に反対しますね。

「これだけは許せません。これだけはなんぼなんでも無理です」

と、私ならそう言いますよ(笑)。皆さんはどうですか。それをキリストはあのゲッセマネで苦しみながらも最後は、

「わかりました」

と。本当にそれが御意かどうかを確かめられたんです。死ぬのはいやではないんです。

「本当にそれが御意ならば、敢然として従います。それをはつきりさせてください」

というのが、あのゲッセマネの祈りだったと私は思っています。だから、ゲッセマネから立ち上がられたらもう敢然と一本道を行かれました。ピラトの前であろうと誰の前であろうと。ですから本当に、義の報いは永遠の生命なのに、その死を受けとられた。これが愛です。神の愛の極致です。

●「我は道なり、まことなり、生命なり」

それから、キリストの言葉で、いくつか好きな言葉があります。人間として生き方を示してくださる、そういう言葉が私には必要なんです。それは、

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と。これです。

「私という道を一緒に歩めばまちがいない」

と。みんな自分の生きる道を探しているんですよ。まずは、青年時代は、

「自分の取り柄は何だろうか。自分は、どうすること一番、この地上に賜った自分の生命を最大限生かせるのだろうか」



ということ、一生懸命に己を探しています。でもそれは、同時にまた生きがいというものにもつながるからです。それから同時にそれが間違つた道であつてほしくない。ドロボーが生きがいだったら困りますもの。やはり、自分の才能が神さまの御意にかなう形で生かされる、そういう自分を生かすということ、自分の取り柄を生かすということが同時に神さまの御意にかなうという、これであつてほしい。それで、キリストに來ますと、

「我は道なり、我はまことなり」

と。人が歩んで行く道、間違いない道、それがまことである、本ものである。

「間違つた道ではないよ」

と。道というのは自分で踏みしめ踏みしめ歩いていく、人が代わりをやつてくれない、自分で踏みしめて行く道なんです。それが変な道へ行つたら困ります。出発点が大事です。ちがう方向に行つたらもうどうにもならない。それがまつとうな道、まことなる道である必要がある。だから、「我は道なり」と言う。

「まことである」と。そして「生命である」と。永遠の生命です。この三つがワンセットで我々に賜るといふこと。つまり、

「私を信じて歩くならば、この三つは成就する。間違いないよ」

というお墨付きを我々はいただいているんです。だから、私は安んじて主に帰依します。

「キリストを信ずる」とか、「キリスト信仰」という言葉もいけれども、我々に親しい言葉としては、「帰依」、「帰依する」という。そこに全幅的に任せてしまふ。小池先生は、「帰入」という言葉を言われました。キリストというお方の中に帰つて入つて行く。

「さあ、帰つておいで」

というお招きに対して帰つて行く。それから同時に、それは祈り入つていく。「祈入」です。そのお方の中に祈り心で入つていく。どうして入れるかという、十字架でちやんと門が開かれていますから。もう開かれたる門です。門は開きっぱなしなんです。永久に閉ざされなない。閉門時間はありません。永久に開かれている。十字架で開かれている。そこに帰依し帰入し祈り入つていく。これです。

●「わが語りし言は靈なり、生命なり」

そして、キリストの語つてくださった言葉は、

「わが語りし言は靈なり、生命なり」

と、ヨハネ伝6章にありますね。ただの言葉ではない。それは靈言である。靈の生命が宿つている言葉である。だから、声をかけると元気になるといふ。

さつき、東京から電話すると京都にいる孫がうれしそうに微笑んでくれたといひましたが、それは何か伝わつたんでしょ。また、そういう思いで受けとつてくれるからでしょ。キャッ



チしてくれるから。やはり、送り手と受けとり手が一つでなかったら、それは伝わらない。だから、昨日の電話は私にとつてももの凄く祝福でした。

「ああ、神さまの世界はこういうものだ」

と。信じて受けとるならば、スツと入ってきて、そこに変化を起こす。神の御業がそこで現れてくる。

「神の業とは何でしょうか」

と、ヨハネ伝6章に出てくる。

「神の業とは、神の遣わし給いし者を信ずるこれなり」

と言われた。

「神の遣わし給うた者」

とはイエスさまです。それを受け入れる、信受する、これが神業だかみわざと。そこからすべてが始まるよということ。そこからすべてが始まる。明け渡してそこに入ってくる。その方が中かたで御業を行ってください。イエスご自身もそう仰ったでしょ。

「私は自分からは何もできない。父はすべてをお示しになる。私の語っている言ことばは私の言ではない。父の御業である。私が行っているさまさまな善き業は全部、父が私をおしてなまじっている。父は今にいたるまで働き給う。だから、私も働いている。父と私とは一つである」

と言われた。今度は、私たちも、皆さんも、

「イエスさまと私はそのように一つなんだ」

と。これは神さまの側の御約束なんです。我々が勝手に思うのではない。

●聖霊のキリストわがうちに

それはヨハネ伝の14章から16章までお読みになったら、その通りのお話になっている。逆さかにいうと、それしか書いてない。

「父と我とは住すま処かを共にする」

「私はあなた方のために処ところを備えに往く。そして、用意が終ったら、また迎えに来るよ。処を備えたならば、また来て、私の許に迎えてあげるから。私のいるところにあなた方も一緒に居るためである」

と仰った。これは

「我々がこの世を去ったあと、私たちの往くべき場所を備えてくださった」と、そう受けとっていただいで結構です。それからずっと行きますと、

「私の言は私の言ではない」

ということを言われて、10節に、



「私は父なる神さまの中におり、神さまが私の中にいらっしゃるといふことを、お前は信じないのかね」

と、ピリポにそう仰った。

「私の語っている言は自分からしゃべっているのではない。父なる神さまが私の中で御業を行っておられる。御言も御業もみな父のわざである。我は父に居り、父は我に居給うなり」

と。そして、

「私を信受する者は私の業を行う。もつと大きな業を行う。私が父の許に行き、そして聖霊という姿で帰ってくるから」

と。それは助け主、聖霊という姿で帰ってきてくださる。この聖霊という姿のイエスさまは、永遠にあなた方と一緒にいてくださるお方だと。これは地上のイエスさまですから、将来のことをこういう形で仰っているけれども、今だったら別ですよ。

「私は聖霊となってお前の中に宿る」

と。ちやうど、天界にいた霊なるキリストが地上で肉体をとってくださいました。これが第一段階。第二段階は今度は、天上に上られた、復活された霊的人格であるイエスさま、この方が聖霊という姿となってお前たちの中に宿る。これが第二段階です。

「これは真理の御霊といい、世間は知らない」

と。しかしながら、このお方は——というのは、「聖霊という姿の私は」ということ、キリストは七変化、八変化かな。天界にもいらっしゃるし、我々一人ひとりの中に聖霊という姿で宿り給う——そういう不思議なお方です。太陽は一つですけれども、太陽の光は我々の中に、我々に届きましょ。我々の中に変化を起こしましょ。誰にでも届きましょ。別物ではないですね。しかし、太陽自身ではない。太陽の分身といってもいい。太陽光線は我々の中に宿る。聖霊というのは霊なるお方として我々の中に宿り、また我々のそばに居てくださいる。

「彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり」

「聖霊という姿の私はお前たちの中に居り、またお前たちと常に一緒に居る。共におり、中に居る。そういう姿だ。絶対にお前たちを孤児にして放つておかないから。復活した私は必ずお前たちのところに帰ってくる。私は生きるのです、お前たちも生きる。そうになると、私は父の中におり、お前たちは私の中におり、私はお前たちの中にいる。そういう一体関係、これがはっきりと分かるであろう」

と。それから、23節にいきますと、

「私を愛する者は私の言を守る。そういう人の中に私は宿るんだから」

と、ということ仰います。



「わが父これを愛し、我ら——我らというのは父なる神と子なるイエス——我らその許に來たりて住処をとにもする。あなた方の聞いている言は私の言ではない。父の御言である。いろんなことを語ってきたけれども、この聖靈の姿の私はお前さんたちに万の事を教え、またすべて地上でキリストが語られたことを想い込ませてくれる。そして、この限りなき平安をお前たちに遺しておく。これは取り去られるようなものではない。何があっても奪われぬものである」

と。そういうことをここで約束してくださっている。15章では、

「しっかりとつながっていない。私は葡萄の樹、お前さんたちは枝だ。枝と幹とは一体である。幹を流れてくる生命、樹液、これが枝を生かし、そして花咲かせて実を結んでいく」

と。15節に、

「もうお前たちは僕ではない。わが友だ」

とまで言ってくださっています。そして、

「お前たちが私を選んだのではない。私がお前たちを選んだ。その目的はお前たちの働きが実を結ぶためだ。そして、お前たちが互いに愛し合うためだ」

ということを仰いました。16章では7節、

「わが去るは汝らの益なり。我さらずば助け主汝らにきたらず」

と。十字架です。十字架を通つて向こうの世界へ行けば、今度は聖霊という姿で、助け主、聖霊という姿で、お前たちのところに帰ってくる。だから、

「悲しまないでほしい。この聖霊が本当に、罪とは何ぞや、義とは何ぞや、審判とは何ぞや、ということをはつきりと示してください。真理の御霊という姿でお前たちに宿るならば、あなた方を導いて真理をことごとく悟らせる。そして、私の栄光を現してください」

と、そういうことを語られています。そして、

「喜びが宿る。その喜びを奪うものはない」

と。素晴らしい言が全部、ここに出てくるんですね。そして、締めくくりとして、

「これらのことを語ったのは、私の中で、私と共にいて、私がお前の中にいて、お前さんが私の中に宿つて、そして本当の平安を得るためである。なんじら世に在りては患難あり、然れど雄々しかれ。我すでに世に勝てり」

と。そして、あとは17章ではお祈りが出てきます。



●神の独り子キリスト

このようにヨハネの福音書が一番素晴らしく、キリストが私たちに何を与えようとしてくださっているか、そういうことが約束されています。マタイだとか、マルコだとか、ルカの福音書は、キリストが地上でどういう愛の御業をなさったか、愛の御業のことが書かれているけれども、ヨハネ福音書は、私たちにこういうことをしてあげるといふ、一番私たちに近いんです、その意味では。

ですから、私はヨハネ福音書を愛読していると言っている。それは他の福音書を否定するわけではない。他の福音書を見て、あんな素晴らしい御業をなさった。それが今度、今、現代に生きる私たちにとっては、どういう奥義となって我々に示されているかということ。ヨハネ福音書は語ってくれている。そう受けとっている。現在の書として、私はヨハネ福音書を受けとっています。

そして、最後になりますが、ヨハネ伝の始めの方に少し戻っていただきたい。ヨハネ福音書の1章14節に、

「言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり。我らはその栄光を見たり。実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり」

と。新共同訳はどうなっていますか。

「言は肉体となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であつて、恵みと真理とに満ちていた。」

と。そこに「独り子」という言葉が出てきます。これに注目してほしい。父の独り子としての栄光。そして、もう少し行きますと、18節に、

「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。」

ここで「独り子」という言葉が出てきます。独り子とは何かわかっていきますね。たくさんの子どもがいるのではなくて、たった一人の子ども。他にはいないということ。唯一独一なる存在としての子ども、神の子ども、独り子。そこに神さまが現れてくる。しかも、その方は

「父のふところにいる」といふ。父のふところに、お母さんのふところに抱かれるように、父のふところに抱かれている独り子キリスト。しかも、その方は、始めの方では「言」という表現で表わされているお方。つまり、霊なるキリストなんです。その方が私たちの間に肉となって宿られた。人の姿をとられた。そこに栄光が輝いていた。それは父の独り子としての栄光である。その内実は恵みと真理そのものであると。

「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである」



と。律法はモーセを通して与えられたけれど、神の恵みと真理はこのイエス・キリストというこの方を通して我々に現された。独り子であるお方が神を示しておられる。

それから、「独り子」という言葉は次に3章に出てくる。16節、新共同訳で読みますと、

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の生命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。」

と。3章では、「独り子」という言葉が16節に2回表れています。そして、18節にまた、「独り子を信じない」とある。「独り子」という言葉がヨハネ福音書の始めの方には繰り返して出てくる。あとはもう出てこない。不思議だなあと思つて、ここを読んでいた。

「¹⁶それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。」

と。即ちこの独り子なる神、我々の中に肉となつて人の姿をとつて現れてくださった神さま、

「この人こそ生ける神なり」

と、讚美歌にありました。そのお方が全き姿で父なる神を現してくださいっている。

「私を見た者は父を見たのである」

と仰つた。こよなき愛はこのお方においてはつきりと現された。このお方を受けとる者は永遠の生命を持つ。このお方を拒絶する者は——生命はもととないんですから、人間には永遠の生命なんてありません。地上の生物体としての生命はあるけれども、それを超えた生命はこのお方からだけ流れてくる——それを「要りません」と言ったら、これはしようがない。

プレゼントというのはいや、これは法律の方でも贈与契約というんですよ(笑)。お母さんから何億円ももらった方がいらつしやる。子どもは

「知らなかった」

と言う。お母さんも、

「それは知らないうちに上げるのが母親でしょ、当たり前でしょ」

と言っている。それは我々もそうですよ。こんなプレゼントを神さまはくださったのに、知らなかったんですもの。永い間ずっと。税務署の調査が入って初めて、ああそんなことがあるのか、いくら課税されるんですか、というようなんですよ(笑)。これは課税しようがない。無限無量だから。だから、ただでいい、税金を納めなくていいです。まあ笑い話ですけども。



●最高のプレゼントはイエス・キリストご自身

このプレゼントは、これはいただくものは、
「はいっ」

と受けとらないといけませんね。我々は人格ですから。でも、本当に素晴らしい贈物ですよ。神さまから我々にくださった最高のプレゼント、これはイエス・キリストご自身をくださったんです。サンタクロースが持つてくるそんな品物ではない。イエス・キリストというその霊的ご人格そのもの。その方は、

「私たちと一緒になろう、なろう、なろう」

と、プロポーズをし続けておられる。プロポーズ、プロポーズ、プロポーズということで、ずっと呼びかけておられるんですね。そして、

「はい、いただきます」

と言ったら、もう瞬間に一つになってしまおう。

「以後、あなたをお守り申し上げます」

と、聖霊が我々を助けてくださる、執り成してくださる。助け主、助け手なんです。もったいない話でしょ。

その目的は何か。我々を全く神の子とするため、キリストと同じ栄光の姿に我々を変えるためなんです。突然に変わるのではない。徐々に徐々に変えられていくんです。そうでしょ。キリストの御霊の働きが強くなればなるほど、我々の内なる人は創り変えられていく。変貌していく。そして時満ちて、向こうに召されたときにサッと向こうに入れるか、

「いやいや、まだ入れないよ」

と言われてストップがかかるか。

神さまは万人を救おうとしておられる。決して地獄に突き落とそうとなさっていない。でも、生きている間に神さまのことを全く知らない人が突然、光のまばゆい世界には入れない。絶対に入れない。合わないですからね。光に入る者は、光にふさわしい性質に変えられないと入れない。そのために長い間、そこでテーチング(教示)を受けなければならぬ。もう一度、一からやり直しますよと。

「あなたは物理学ではノーベル賞だが、でも霊の世界においてはあなたは一年生にもならないよ、やり直したよ」

と。これが霊界の法則です。私はそう信じています。だから、平等なんです、公平なんです。大金持ちの門前で、非常に皮膚もただれ物乞いをして、実に不幸だったラザロ。それが死んだ時に、御使たちに迎えられてアブラハムのところへ行った。他方、金持ちは盛大なお葬式をしてもらったと書いてある。ところが、向こうへ往ってみますと、火炎の中にもだえ苦しんでいる。目をあげて見ると、アブラハムのところにラザロがおるではないか。金持ちが



「おーい、ラザロよ、来いよ」

と呼んでも、アブラハムは、

「無理だ、無理だ、越えられない淵がある」

と言って、拒みましたね。

「わかりました。でも、お願いです。自分たちの兄弟がまだ生きております。私と同じような生活を送っています。二度と私のような苦しみをなめないように、彼らのところにラザロを遣わしてください。死者の国から死を味わった人がもう一度人間となつて、「向こうはこうだったよ」と情況報告したら、彼らはきつと悔い改めるから」

と言ったわけです。

「だめだよ。モーセを信じない者は、たとえ死人の中から甦った人が言いに行つたって、信じるはずがない」

と言った。あれは譬話たとえばなしですよ。でも、実に真理をうがっています。

● 臨死体験

時々、我々は臨死体験をした人の話を読む。私は非常に真理に満ちていると思つています。臨死体験の報告書は。けれども、信じない人は信じないでしょうね。でも、あれを読んで、

「ああそうか。この地上を超えた世界が本当に実在するんだな。臨死体験をさせられた人は、一度向こうの世界をかいまみて、それを地上に伝達するためにもう一度送り帰されてきた神の恵みの使い手だな」

と、そう思つて、目が開かれて、その道に行く人は祝福された人。でも、

「あんなのはウソだよ」

なんて言つて、蹴飛ばしている人はいつまでたつてもだめですね。いろんな手段を通して神さまはご自分の世界を示そうとしておられる。身体障害を負った人とか、この世で非常に不幸な生活を余儀なくされた人たち、その人たちの生きざまを通して、神さまは本当に大事なものは何かということをお示しになっていると、私は思っています。

すべてこの地上に置かれているものはすべて存在理由がある。それは神さまに用いられたら、素晴らしい祝福にあずかる。それを、自分の運命を呪っていたら、天に唾つばきしていたら、いつまでも道は開けない。どんな運命環境の中で、どんな苦しい経験をなされた方も、どんなに行き詰まろうと、どういう目に遇おうと、そんな人にこそ神さまは特別なみ思いをもつて祝福の手をさしのべておられる。だから、

「幸いだよ、今、涙を流している人は。幸いだよ、今、悲しんでいる人は。私がお前の本当の慰めとなるから。お前の苦しみを私は知っているよ」



と。このみ声を聞いてほしいんですね。

「私が地上にやって来たのは、その福音を、この喜びのおとずれを伝えるためにやって来たんだよ。そして、あのように生活し、あのような苦しみを受けて、そして天界に行つて、天に行く道を開いた。道だ、まことだ、生命だという、これも今も語り伝えていってるんだよ」

と。その私たちは証^{あかし}びとなんです。それは言葉で証するのではない。自分たちの生き方そのもので、日常生活を通して、日常生活の中にそれが実証されていかないと、それは本ものになりません。

●天命を自覚して今から再出発

ですから、今日はいろんなことを申しましたけれども、このクリスマスを機にして、このイエスさまが地上に来てくださった。これは、皆さんお一人お一人にとつて、どういう深い深い奥義が秘められているか。お一人お一人みなちがうんです。お一人お一人の人生はみなちがう。あなたでなければ歩めない道、そこへと導こうとしておられる。その天の与えてくださった使命——天命といいます——その天命を自覚して、それに今から再出発していただきたい。光のスピードできつと運んでくださいますよ。

「80歳、90歳になつて目覚めた。それは大変だ。さあ行こう」

と、超特急で連れて行つてくださいますよ。人生経験を積んできたんだから、飛び級で行かしてくださる。

「若い人はこれから人生経験を積んでいきなさい。いろんな苦労があるだろう。けれども、あなたは祝福された人だ。この世の価値観にとらわれないで。しかし、人に頼つてはだめだよ。甘えてはだめだよ。自分で全力投球でやりなさい」

と、これを是非言つてほしい。

「信仰を持つたら試験は勝手にパスする。信仰を持つたら、ひとりでに数学がわかる」なんて、そんなのはありませんから。みな努力しないとだめです。努力が楽しくなる。そういうふうと言つてください。何か、「信仰」と言うと、摩訶不思議な麻薬みたいに受けとつている人が多い。そして、

「私はこんなに信じているのに、だめでした。神さまはいるんでしょか」

なんて。そうじゃない。我々を勇者にしてください。英雄です。神に在つて英雄、勇ましい生涯を歩まそうとして道を備えてくださっているんですから。その人生を生き抜いて、

「キリストに在る人生は素晴らしかった」

と、それを後に続く者に伝達していく。これが私たちの使命ではないかと思う。それがさつきの「光輝く高霊者」たちの、本当に使命ですよ。

「ああいう、おじいちゃん、おばあちゃんみたいに輝いて生きたい。おじいちゃん、



おばあちゃんがあんなに喜んで晩年を過ごしている。きっと素晴らしいものが待っているのにちがいない」

と。私たちの京都キリスト召団でそれを実証しているのは、小野はつきんです。98歳になりました。背筋ピンです。身の回りは全部処分されました。何も残っていない。もう召される日をひたすら待ちながら、嬉々として喜びにあふれて生きておられます。まるで、シメオンさんか、女預言者アンナみたいな生き方をなさっている。素晴らしい祈りを毎回してくださいませよ。そして、

「どんなに身体が辛くても、集会に来たらシャンとする」と仰るんです。

「独りでに足が集会に向かう」

と言って、来てくださる。そういう福音の証人がちゃんと現にいらつしやる。私は小野さんと21歳ちがうので、なかなか小野さんにたどりつくには、常に21歳向こうに年齢を設定しないとイケない。しかも、乗り越えないといけませんからね、導き手としましては(笑)。皆さんも、そういうつもりで。

それは身体は傷みますよ、あちこちに故障が出ますよ。それが出なかつたらウソですよ。それは若いときのようにいきません。しかし、

「内なる人は日々あちに新たなり。外なる人は破れるれども、日毎ひごとに新たなり」

と、そういう意気盛んに、皆さん、歩んでください。そして家族を巻き込んでください。

「おじいちゃんが来てくれたら、元気になる。おばあちゃんたちが来てくれたら、うれしくなる」

とか。そういうおじいちゃん、おばあちゃんになってください。そして、時にはプレゼントをやるとか。そういうおじいちゃん、おばあちゃんに。お父さん、お母さんは苦しいと思うんです。子育てでもうフラフラですから。そういう側面からの助けになるのがおじいちゃん、おばあちゃんの役目なんですよね。

まあ、そういうことで、やはり、どんなときにも楽しく希望をもって生きるような、そういう人生。これを神さまは私たちにキリストを通して提供して下さっていると、そういうクリスマスでありたいですね。はい、それではこれで終りいたします。

● 祈り

お祈りいたします。

主イエス・キリストさま、ありがとうございます。こうして、今日のクリスマス集会にあちらこちらからあなたを求めてやって来て下さいました。初めてお出で下さった方もいらつしやいます。比較的、年齢を召した方が多いようですが、このルカ福音書をみますと、



そういう人たちを通してこそ、あなたは大事な大事な神さまの御業を現していられました。主さま、人間はいくつになっても使命を持っています。あなたは使命を授けてくださいました。

「誰でもキリストに在るならば新しく創られたるものなり。旧きは過ぎ去った。」

視よ、一切、新しくなった」

と、コリント書簡は証言してくださっています。

「人、新たに生まれずば神の国を見ることあたわず。人は上より生まれければ神の国に入ることはできない」

と、あのニコデモに仰いました。あなたさまが私たちを新しく生み出してくださいるお方。ご自分の生命をかけて、私たちに永遠の生命をくださいました。希望を与えてくださいました。本当の生きがいというものを示してくださいました。

どうか、この日本の中において、ここにお集まりくださったお一人お一人が今日また新しい出発として、新しい人生へと歩みだしていけますように、あなたがバックアップしてくださいますように。また、先頭になつて導いてくださるように希い奉ります。

共に居り内に居てくださいる聖霊なる助け主、主イエス・キリストさま。あなたをくださった神さまを讃えます。主さま、どの民族も同じです。名もなき名前をもたない根源なるお方、その方があるいはハウエーといい、また別の名を呼ぶだけです。その名もないお方がイエスというお姿をとつて地上に現れてくださった。これこそ神の実証体、人となりたる活ける神でございました。それをイエス・キリストのご生涯をお示しくださり、地上を去つて、贖いわざを終えて、天上にのぼられて、いよいよ今、聖霊という姿で御業を展開してくださいっています。

我々一人ひとりがあるようなイエス・キリストさまの愛の生命をいただき、主イエス・キリストさまと聖霊をいただいて一体とせられて、神さまの御意にかなう生き方に、神さまの御業に参画していく生きがいある生涯を導いてくださるように希い奉ります。

争いの多いこの世に本当の和をもたらしてください。愛のないところに本当の愛を現してください。私たちが必要とする人のところへ私たちをお遣わしてください。闇の中に光が輝きますように。病める者の中に本当の生命を与えたい、本当の希望を与えてくださるよう希望を希い奉ります。

これらの願いと祈りと感謝を、兄弟姉妹の祈りとともに主イエス・キリストの貴い御名をおとして御前にお捧げいたします。アーメン。

(小冊子『神の最高の贈物』2010年8月18日発行より転載)

